

～毎月 10 日は人権を考える日～

「人権意識の芽生え」を支えよう

子どもたちの素直な心を、そのまま真っすぐに伸ばしたいと誰もが思うのではないのでしょうか。そのためには、子どもにかかわっている周りの大人のしていること、言っていることが大きな役割を果たします。幼い子どもほど影響が大きいのですから、親、家族のかかわりがとても大事です。

親は、生まれた子どもに笑顔で接し、この子の求めているものは何かを考え、要求しているものを与え続けます。そして、子どもが分かっているかいないかに関係なく話しかけます。その言葉は、愛情に溢れています。そのようなかかわりは、その子にとって心地よいものに違いありません。そのようにして、子どもは「自分が愛されている」ということを実感していくのだと思います。自分が必要とされているという感覚は、大人が意識していなくても子どもの心に刻まれていくし、自己肯定感を身につけていく過程から必要なことなのです。

やがて子どもが成長するにつれて、子育てが大変になってきます。大変になればなるほど、大人は、手のかからない子どもになってほしいと考えます。しかし、ここで考えなければなりません。手のかからない子どもになることが、本当に子どもにとって良いことなのでしょうか。いっしょに手をつないで歩いているときに、ふと立ち止まる子ども。急いでいるのだから早く行きたい親、しかし親の都合まではわからないのが子どもです。子どもの視線の先には可愛い花が咲いていて、それをじっくり眺めたいのかもしれないかもしれません。親の顔色を見て悟ることは大切なことです。でも、かわいい花を見つけてその花を眺めて美しいと感じる心を子どもに持ってほしいと思いませんか。かわいいものを見てかわいいと感じるのは、人権意識の芽生えです。子どもによってその感じ方は違います。いつまでもきれいに咲いていてほしいと、花の命に思いを巡らす子どもの感性を大人の都合で遮ってしまっていないでしょうか。

子どもたちが集団になると、いろいろなことが起こります。いっしょに何かをすると楽しいと思えたり、一人でできないことを手伝ってもらうことができたり、時にはけんかになったりすることもあります。このような活動の中で、たくさんの事を学ぶのです。自分が思っていることと友達が思っていることが同じだったり違っていたりするのです。一人ひとりにそれぞれの、自分とは違う考えがあります。自分が大事のように友達が大事であることを学びます。争いをどう解決するかも大事な学習場面です。子どもに必要なのは、自分で解決していく力です。大人が解決しても次につながりません。なにより子ども自身がその力をつけていくことが、人権意識を育てていくうえで大切なのです。